



日本・ギリシャ外交関係樹立110周年記念企画展

ラフカディオ・ハーンとギリシャ

もうひとつのルーツと受け継がれる精神性

2009年4月25日(土) — 2010年3月31日(水)

主催：小泉八雲記念館(NPO法人松江ツーリズム研究会)

今年、日本とギリシャの外交関係樹立110周年にあたることから、ギリシャとの文化交流を深めるために企画展を開催します。展示品は、2008年9月に小泉凡がギリシャ訪問の際に撮影した、ハーンの母ローザの生誕地キシラ島やハーンの生誕地レフカダの写真と、ギリシャでハーンを介した日本との文化交流の実現に奔走しているタキス・エフスタシウ氏が2008年11月に松浦正敬松江市長に寄贈したギリシャの美術品を展示・公開します。すなわちこの展示は、ハーンがギリシャ

から賜ったと告白する精神性が後世のアーティストへどのように受け継がれていったのか、また造形芸術によってハーンの精神性や文化背景を表現することの可能性を示唆するもので、新しいスタイルによるギリシャとの文化交流の布石になると考えています。

問い合わせ先：小泉八雲記念館(Phone: 0852-21-2147)

オープニング・セレモニー：4月25日(土)

[別添資料] 企画展あいさつ文、解説、主要展示品

企画展あいさつ文

ラフカディオ・ハーンとギリシャ

もうひとつのルーツと受け継がれる精神性

パトリック・ラフカディオ・ハーン(小泉八雲)は1850年6月27日にギリシャ・イオニア諸島のレフカダ島に生を享け、父チャールズの実家のあるアイルランド・ダブリンに移るまでの約2年間をギリシャで送りました。ミドルネームの「ラフカディオ」はこの地名に因んでいます。また、レフカダと松江とは、ふしぎにも「渦」の風景としての共通点があります。

ハーンは、ギリシャ人の母、ローザ・カシマチ(1823-1882)と4歳の時に生き別れて以来、2度と会うことはありませんでした。しかし、母への強い愛惜の念とともに、ギリシャ人としてのアイデンティティを誇り高く持ち続けました。古代ギリシャの神々が奔放に活躍する多神教世界や小動物にも魂を認めるアニミズム的感情に、日本文化の共通性を重ね、自分の心の中に理想郷としてのギリシャ像を思い描いていったのです。

2009年は日本とギリシャの外交関係樹立110周年にあたり、ささやかな企画展を行うことにしました。2008年9月のギリシャ訪問時に撮影したハーンゆかりの地、とりわけキシラ島やレフカダ島の写真を中心にご紹介

します。ハーン之母ローザの生地キシラ島では、島民が誇りを持って語り伝える、評伝の言説とは異なるローザの物語や、島民のハーンへの愛情に満ちた関心に心を揺さぶられ、自分のギリシャのルーツがここにあることを確信しました。また、私たちがギリシャの旅に誘ったタキス・エフスタシウ氏が、2008年11月に来松された際に松浦正敬松江市長に寄贈したギリシャの美術品を同時に展示公開することにしました。その中には、ハーンをこよなく愛した現代ギリシャを代表する画家テオドロス・スタモス(1922-1997)の作品も含まれています。

すなわちこの展示は、ハーンがギリシャから賜ったと告白する精神性が後世のアーティストへどのように受け継がれていったのか、また造形芸術によってハーンの内面や文化背景を表現することの可能性を示唆するもので、新しいスタイルによるギリシャとの文化交流の布石になると考えています。

小泉八雲曾孫 **小泉 凡**

解説

1——キシラ島

ラフカディオ・ハーンの母、ローザ・アントニア・カシマチは1823年、キシラ島の中心地キシラに生まれた。1848年4月、ローザの生家の眼前に聳えるカプサリ城塞に、英国陸軍第45ノッティンガム歩兵連隊に所属する軍医補チャールズ・ブッシュ・ハーンが赴任してきた。チャールズは城塞内の教会に熱心に通うローザとまもなく恋に落ちた。チャールズ30歳、ローザ25歳だった。ふたりの結婚に反対したローザの兄デミトリオッシュが、チャールズをナイフで刺したというエピソードはハーン自身が語っているが、真実のほどはわからない。1849年6月、チャールズのレフカダへの転任に伴い、ローザもチャールズとともに島を離れた。

ローザは、息子ラフカディオが4歳のころ、彼をダブリンに残したまま不安定な精神状態となってキシラ島に帰ってきた。そしてジョン・カバリニというイタリア・ジェノバにルーツをもつ男性と再婚した。その息子アンジェロは、後に人々から敬愛される聖職者となり、今もキシラ島にはアンジェロから洗礼を授かったことを誇りとする老人たちが生存している。評伝によれば、概してローザは無学文盲で感情に走りやすい女性だとされているが、島の人々の伝承では、ローザの家のすぐ下に学校がありローザは非常にハイレベルの教育を受けていた、また、つねにダブリンに残してきたラフカディオのことを気遣っていたと伝えている。なお、ローザは1882年にコルフ島で亡くなっている。

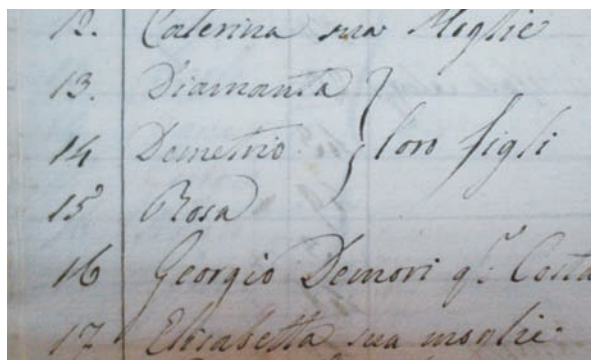
キシラ島はペロポネソス半島南東端のイオニア海・エゲ海・クレタ海の交わる海上に浮かぶ人口3000人の島。美と愛の女神アフロディーテが泡の中から誕生し、風によってこのキシラ島に運ばれたという名高い物語がある。中世以降だけでもトルコ・ヴェネツィア・フランス・ロシア・イギリスの支配を受けた。

2——レフカダ島

ラフカディオ・ハーンの父チャールズ・ブッシュ・ハーンは、キシラ島からローザをともなって、1849年6月にレフカダに移り、翌年2月まで滞在した。チャールズがアイルランドに召還されてから4ヶ月後の1850年6月27日、パトリック・ラフカディオ・ハーンはレフカダ島の中



ローザの生家。今もそのまま残っているが、中は改装中だった。



キシラ島の文書館に残る当時の住民台帳。ローザ(No.15)と二人の兄弟(ピアマンタ、デミトリオッシュ)の名前がみえる。



ローザの墓。1882年に亡くなったローザが、再婚者の家族とともにここに眠っている。

心地レフカダで生まれた。ミドルネームの「ラフカディオ」は「レフカダっ子」という意味をもつ。聖パラスケヴィ教会(ギリシャ正教)で幼児洗礼を受けるが、「パラスケヴィ」は目を司る神で、目を負傷したハーンがのちに薬師信仰に共感したことと不思議にも通じ合う。同年8月にはラフカディオの兄、ロバートが熱病で死亡し、同教会に埋葬された。ローザはひとり幼子をかかえて日当たりの悪い路地裏の家で不安な日々を送っていたことが想像される。ハーンとローザは1852年8月、パリから迎えにきた叔父リチャードに伴われ、マルタ島経由でチャールズ

の実家のあるアイルランド・ダブリンに向かった。

レフカダと松江は、堤防や砂州によって外海から隔たれた「潟」の風景としての共通点がある。いずれも西側に海があるため、靄が立ち込めたような光景も共通している。ハーンが宍道湖の風景を愛したことは記憶以前の原風景としてのレフカダの風景を重ねたのだろうか。

レフカダはギリシャ西部イオニア諸島の中で4番目に大きな島。堤防道路と橋によって本土とつながっている。人口は22,879人(2005年)。レフカダも他のイオニア諸島と同様に、19世紀中ごろまでは、マケドニア・ヴェネツィア・フランス・ロシア・イギリスなどから支配を受けた。

3——受け継がれるギリシャの精神性

ハーンはよく子どもの頃、ノートの余白に筋肉の絵を描いていたという。そして、その後も古代ギリシャ彫刻にみる並外れた肉体美について永く自問してきた節がある。ハーンが出した答えは、羞恥心がない時代だからこそ「愛の直観を通して、彼らは人体についての神々しい幾何学的観念の秘訣を発見したのです」(チェンバレン宛書簡)というものだった。つまりギリシャ芸術はキリスト教的な倫理観にとらわれないからこそ美しいと考えた。後年、ハーンはみずからも、10キロのダンベルで体を鍛えることを怠らなかつた。

ギリシャへの愛着と憧れは肉体美だけではなかつた。弟ジャームズに宛てた手紙に、自分の長所はあの浅黒い肌をしたギリシャ人種の魂から受け継いだものだと書いている。「私が正しいことを愛し、間違ったことを憎み、美と真実を崇め、男女の別なく人を信じられるのも、芸術的なものへの感受性に恵まれ」たことも。つまり、自らが自信をもって貫いてきた価値観をギリシャからの賜り物と考えている。

後にハーンが「夏の日々の夢」に書いた「ある場所と、ある不思議な時の記憶」「小さな王国」「神さまのようなその人」が、原風景のギリシャと母のイメージを重ねたものであるとすれば、ギリシャへの憧憬は母への愛惜の念がその中核をなしていたといえるかもしれない。松江の大雄寺に伝わる子育て幽霊の話を「母の愛は死よりも強し」と言い換えて結んだことから母への強い想いが伝わる。

時を経て、ハーンのギリシャへの想いが、代表的な



上：ハーンの生家がある通り、「ラフカディオ・ハーン・ストリート」。

右：ハーン・ストリートのサイン。



現代ギリシャ画家テオドロス・スタモスの琴線を震わせ、また、スタモスの親友タキス・エフスタシウ氏がこれに呼応するように、ハーンを介したギリシャと日本の文化交流の実現に奔走している。アテネのアメリカン・カレッジのハーンコレクションや今後展開されるギリシャ現代アーティストらによるハーンをテーマとする造形芸術のエキジビション、野田正明氏によるハーンの心を抽象化したモニュメントの作成など、ハーンがもつギリシャの精神性の継承と再評価が行われつつある。

参考文献

O.Wフロスト『若き日のラフカディオ・ハーン』

西野影四郎『小泉八雲とヨーロッパ』

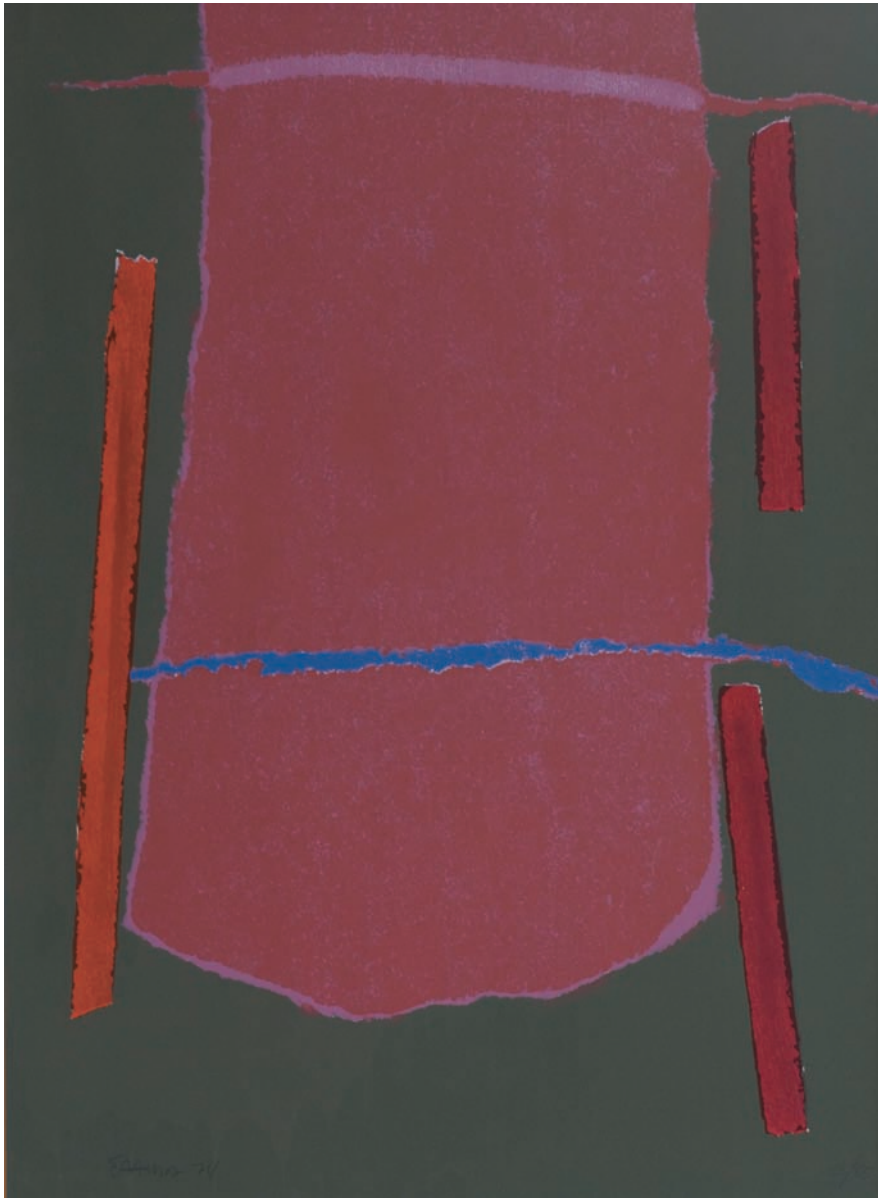
工藤美代子『聖霊の島——ラフカディオ・ハーンの生涯[ヨーロッパ編]』
『ラフカディオ・ハーン著作集』第15巻

『小泉八雲事典』

KYTHIRA (Comprete and Up-to-date Travel Guide)

『夏の日々の夢』

主要展示品



テオドロス・スタモス

インフィニティ・フィールド レフカダ・シリーズ

〈オリジナル：シルクスクリーン、1974年〉

1974年にアテネ美術館が彼の個展の開催を記念して限定プリントしたもののうちの1枚。

タキス・エフスタシウ氏寄贈

Theodoros Stamos

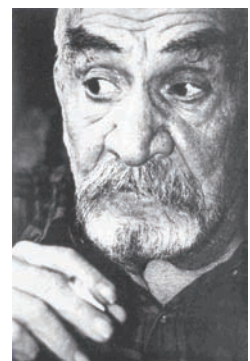
Infinity Field Lefkada Series (Original: Silk screen on paper 1974)

98(H)×78(W)

テオドロス・スタモス(1922-1997)

Theodoros Stamos (1922-1997)

1922年ギリシャ系アメリカ人としてニューヨークに生まれる。第一世代の最も若い抽象表現主義の画家のひとりで、1940年代～1950年代をニューヨークで活躍した。1936年にアメリカン・アーティスト・カレッジで学び、1958年～1975年までブラックマウンテン・カレッジなどで教えた。1970年代後半に多くの作品をギリシャ国立美術館に寄贈した。また、彼がなくなった翌年、同美術館で回顧展が開催された。晩年をたびたび父親の故郷ギリシャ・レフカダで過ごし、今もレフカダに眠っている。



ソテリス・テリアノス

夢

レフカダ出身のアーティスト、テリアノスが2003年8月の地震直後のサン・ニキタスを表現した作品。

タキス・エフスタシウ氏寄贈

Sotiris Therianos

The Dream

After earthquake 14 Aug. 2003

30.4(H) × 40(W)



ジョン・ヘニング

パルテノン神殿、石膏の装飾壁〈1819年〉

当時、イギリスの外交官だったエルギン伯爵トーマス・ブルースが、パルテノン神殿の貴重な彫刻を国に持ち帰った。ヘニングの作品は、現在大英博物館に展示してあるそのエルギンマーブルのミニチュアの複製としてよく知られている。ヘニングは、パルテノンの装飾壁の美しさに感銘を受け、そのレプリカを作る許可を得た。オリジナルは、メトヘスと呼ばれ、パルテノン神殿の外壁に彫刻されており、フィディアス(BC480-BC430)によってデザインされた。

タキス・エフスタシウ氏寄贈

John Henning

Plaque of the Parthenon Frieze Plaster (1819)

40.8(H) × 29(W)